

<エッセイ>共感の人物史

著者	呉座 勇一
雑誌名	日文研
巻	56
ページ	19-24
発行年	2016-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00006478

<エッセイ>共感の人物史

著者	呉座 勇一
雑誌名	日文研
巻	56
ページ	19-24
発行年	2016-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00006478

共感の人物史

呉 座 勇 一

最近、パーティーなどに出かける機会が増えた。そこで研究者以外の方と知り合って、日本史を研究していると話すと、必ずと言っていいほど「好きな歴史上の人物は誰ですか？」と尋ねられる。気軽に問うているのだろうが、答える側の立場を想像していただくと、意外と厄介なことに気づくだろう。「織田信長が好きです」「坂本龍馬を尊敬しています」では月並みだし、逆にマニアックな人物を挙げて、相手が知らないから話がはずまない。だが、それ以前に私は特定の歴史上の人物にあまり思い入れがないのである。これは私のドライな性格にもよるのだろうが、「好きな歴史上の人物、特になし」という同業者は少なからずいるのではないか。

一般の方のイメージでは、歴史研究者は歴史上の偉人を研究しているのだろう。誰かを研究しているはずだと思っているから、「誰が好きですか」という質問をするのである。しかし、歴史学は必ずしも個人に注目して研究する学問ではない。むしろ近代歴史学は、そういった“英雄史観”を否定するところから出発した。日本最初の歴史学会である史学会の初代会長に就任した重野安繹（一八二七〜一九一〇）は明治二二年（一八八九）、設立総会の講演「史学に従事する者は其心至公至平ならざるべからず」において、歴史研究と道德教育の分離を提唱し、旧来の英雄中心の歴史像を批判している。

重野は言う。忠臣義士と讃えられている人物にも多少の過ちはあるし、乱臣賊子とけなされ

ている者にも少しは良いところがある。だが歴史を道徳に利用したいという思惑が入り込むと、忠臣の欠点や乱臣の美点を捨象して、勸善懲惡の物語に単純化してしまいがちである。これは事実を曲げて人を欺く行為に他ならず、客観公平な態度とは言えない。歴史的事実を明らかにし、それをありのままに伝えてこそ、真の教育の基礎となるのである、と。重野が近代日本における実証史学の祖と評価されるゆえんである。

重野は軍記物『太平記』中で南朝の忠臣として活躍する児島高德を、『太平記』作者の小島法師が創作した架空の人物であると説いたり、『太平記』の名場面として知られる楠木正成・正行父子の「桜井の別れ」を「拵話」と断言したりしたため、「抹殺博士」の異名をとった。ここから分かるように、伝説・逸話・美談の史実性を疑う実証史学は、個人の英雄的活躍を否定する傾向を持っていたのである。

重野と共に帝国大学文科大学の国史科設立時の教授をつとめた久米邦武（一八三九～一九三一）は、明治二三年（一八九〇）に「英雄は公衆の奴隸」という論文を発表した。久米は、英雄の事業の成否は公衆の意思に左右されると述べ、「英雄史観」と決別した。福沢諭吉（一八三五～一九〇二）や田口卯吉（一八五五～一九〇五）ら文明史家も、英雄よりも時代・社会を重視する姿勢を打ち出しており、英雄崇拜の排除という問題意識は正史編纂を担う官の世界の専有物ではなく、国民一人ひとりの自立を願う多くの近代的知識人に共有されていたのである。

いわゆる久米邦武筆禍事件により、明治二五年（一八九二）に久米は帝国大学を去り、翌年には帝国大学史誌編纂掛が廃止され、重野は史誌編纂委員長の職を解かれた。以後、新たに設置された史料編纂掛（のちの史料編纂所）を中心とする官学アカデミズムは世間の物議をかま

す大胆な新説提起を避け、史料の基礎的研究・考証に徹するようになった。当然、歴史上の人物への踏み込んだ評価はなされなかった。

実証史学つまらなさは、人物史の欠如に起因すると見られることが多い。実際、「学問の中の最も乾燥無味にして最も倦み易きものは歴史学なるべし」とアカデミズム史学を指弾した野の歴史家である山路愛山（一八六五〜一九一七）は、『足利尊氏』『豊太閤』『源頼朝』『西郷隆盛』などの英雄伝を次々と発表した。これは、「時勢は人を作るものなれども、人もまた時勢を作るものなり。歴史家の眼中は決して人物を脱すべからざるなり」という彼の信念に基づくものであった。

また、客観的・科学的と称して個別実証に終始する実証史学を「無味乾燥なる履歴書の考証」と一蹴し皇国史観を主導した平泉澄（一八九五〜一九八四）は、南朝の忠臣を積極的に顕彰した。「百姓に歴史がありますか。豚に歴史がありますか」という彼の有名な発言が象徴するように、平泉の歴史観は優れた人格を有する英雄・偉人の事跡を中心に据えるものであった。歴史は「科学よりはむしろ芸術である」と言っていた平泉の研究姿勢は、今日の歴史学界においては専ら反面教師となっているが、彼が語る英雄譚が当時、多くの人を魅了したこともまた事実である。その意味で平泉の皇国史観は近代史学の鬼子ではなく、実証史学発達の反作用として必然的に登場したものである。

英雄伝・偉人伝は子どもでも楽しめるし、道徳教育の観点からも有用である。面白く「社会的意義」のある歴史を手っ取り早く実現しようとする、人物史、それも英雄伝・偉人伝に傾きがちである。その意味で平泉の皇国史観は近代史学の鬼子ではなく、実証史学発達の反作用として必然的に登場したものである。

戦後の歴史学はマルクス主義が主流となり、「歴史は民衆がつくる」という視角が徹底された。加えて、皇国史観が日本を誤らせたという反省から、歴史学界では英雄伝を忌避する傾向が生まれた。かくして人物史の冬の時代が訪れたのである。右派に言わせれば、「名も個性もないノッペラボーな「人民」や「民衆」しか登場しない、英雄不在の退屈な「歴史科学」だ。けれどもマルクス主義歴史学が衰退した現在の日本史学界においても、人物史は流行っていない。若者の興味を惹くべく人物史の復権を唱える史料編纂所教授の本郷和人氏（一九六〇～）は、人物史停滞の要因として、皇国史観アレルギーの残存を指摘する（『人物を読む日本中世史』講談社、二〇〇六年）。確かに藤岡信勝氏（一九四三～）を代表とする自由主義史観研究会が刊行した『教科書が教えない歴史』（産経新聞ニュースサービス、一九九六～一九九九年）も偉人伝の色彩が濃く、ナショナリズムと人物史の親和性は高いと言えよう。だが私はイデオロギー的な問題ではないと思う。前述したように、近代歴史学の黎明期である明治時代から、「英雄史観」を忌避する風潮が見られる。歴史学と人物史の根本的な緊張関係こそが問題の核心ではないだろうか。

中世史家の亀田俊和氏（一九七三～）は、歴史上の人物をテーマに卒業論文を書きたいと指導教員に訴えたところ、「まずは実証的な研究をしっかり成し遂げてからにしない」と諭されたという（『高師直』吉川弘文館、二〇一五年）。これはおそらく亀田氏に限ったことではなく、卒論で人物史をやりたいと言って却下された人は少なくないはずだ。吉川弘文館の人物叢書が典型的だが、伝記・評伝の類は功成り名遂げた大家によって執筆されるべきである、というのが学界の不文律だろう。そこには「実証的に優れた人物史を書くのは難しい」という認識が垣間見える。

重野が指摘したように、どんなに偉大な英雄であっても詳しく調べていけば、短所は見つかる。細かい瑕瑾を数多く発見することが実証性の証でもあるため、伝記を書く歴史家はついそこに注力してしまう。結果、その人物の英雄性は薄められ、「無味乾燥なる履歴書」ができあがるわけだ。それどころか、「本当に英雄だったのか」「作られた英雄ではないか」といった話になることすらある。精密に研究すればするほど、個人の力の限界が見えてくる。歴史を動かすのは組織の力であると思いつき、組織の分析を進めるようになり、人物史から離れていく。しかしながら、その努力は必ずしも人々から支持されないのである。

一例を挙げれば、近年の織田信長研究は、織田信長の革新性を否定する方向に進んでいる。信長の諸政策は他の戦国大名のそれと大差なく、彼の政治思想は朝廷や幕府を尊重する保守的なものだったというのだ。そして成功の理由を織田信長の個性に求めるのではなく、「織田政権」の構造から信長の躍進を説明しようとしている。ところが、それではお客様は納得しないのである。「信長神話を暴く！ 真実はこうだ!!」といった本を意欲的・刺激的とほめてくれるのは「上級者」だけで、一般の読者は革命児信長の天才的閃きを見たいのだ。当たり前のことだが、司馬遼太郎作品はサーピス精神に富んだエンターテインメントだから高い人気を誇っているのであって、人物に焦点を当てて歴史を語りさえすればいいというものではない。

ここに人物史の難しさがある。実証性を高めると、既存の英雄像を崩してしまい、日本史に親しんでもらうという目的を果たせない。かといって記述の正確さより娯楽性を追求するのであれば、歴史小説で十分ということになり、歴史家の存在意義は失われる。これは重野以来の難題だが、本郷氏はこの点に関する明確な解答を用意していないように思われる。私にも名案はないが、まずは英雄頼みの人物史から脱却する必要があると考えている。